



2010年7月28日放送

漢方医人列伝「本間棗軒」

北里大学東洋医学総合研究所 医史学研究部 部長 小曾戸 洋

『漢方医人列伝』シリーズも22回を重ね、いよいよ江戸時代から明治を生きた医家の時代になってきました。今回取り上げる森立之は、幕末に最高水準に達した考証医学を集大成した人物です。

森立之は文化4(1807)年、11月25日に江戸に生まれました。名前の立之は、本来は「たつゆき」と読むべきですが、昭和以来、漢方界では「りっし」で通っていますので、ここでも慣例に従い、「もりりっし」で通すことにします。字は立夫、通称は養真、のちに養竹。号は枳園と称しました。文化系の学界でも、書誌学者、漢学者、蔵書家として知られる人物で、その世界では一般に森枳園で通っています。森鷗外とは血縁関係はまったくありませんが、森鷗外の代表的な歴史小説である『渋江抽斎』にしばしば森枳園の名で登場し、そのユニークな人物像が、ユーモラスに描かれています。

考証学派は、江戸時代の日本漢方を特徴づける一学派として知られていますが、もとは中国清代に興った学問もしくは研究方法を踏襲したものです。その学風は、文献資料を博く求めて検討し、客観的事実に基づいて過去の史実、事物の真相真理を解明しようとするものでした。その研究対象は、古典を中心とし、広い分野にわたりましたが、清朝の考証学は、医学の分野では十分な成果を挙げることはありませんでした。

一方、日本では、とりわけ医学の分野において考証学派の研究が大きく花開き、いくつもの著述として実を結びました。なぜでしょうか。それには次のような理由があると私は考えています。

中国では従来、政治と学問は軌を一にし、むつかしい科挙の試験に合格した人達が官僚となってこれを担いました。中国で医学の著述をなした名医は、科挙に及第できなかった者が転じて医を業とした場合が多く、したがって、一級の学者の独壇場ともいべき考証の学問に、医家は容易に入り込むことができなかつたといっても過言ではないでしょう。

これに対して、日本では知識階級の医家の多くは、幕府医官とか藩医といった身分に属していました。これらの人達は基本的には代々医業を継承するいわゆる世襲制で、家柄、地位も比較的高いものでした。井上金峨・吉田篁漱・狩谷掖斎と進展し、確立していった日本の考証学は、多紀家の主宰する江戸医学館をとりまく医家達に受け継がれていきました。考証医学の基盤を固め、多くの門人を育成した多紀元簡・多紀元堅については、第 15 回で町先生がご紹介した通りです。ほかに伊沢蘭軒父子、小島宝素父子、渋江抽斎、そして森立之、また第 25 回に登場する山田業広などが有名です。

この考証医家達は、幕府権力を背景にしている有利さも手伝って、文献資料の蒐集という点でも恵まれていました。中国では戦乱などによって多くの古い書物が失われましたが、日本には遣唐使以来、日宋貿易、日明貿易によってもたらされた善本医籍が数多く保存されていました。考証学者達は、質量ともに中国を遙かに凌ぐ文献資料を手にすることによって、すぐれた業績を挙げる事ができたのです。江戸の医家達による考証の学問は、医学のみならず、広く漢学、国学の分野に及びました。渋江抽斎や森立之が編集に携わった『経籍訪古志』は、幕末の漢籍書誌学のレベルの高さを示すものとして、つとに定評があります。医家が他の広い文化の担い手となったこと、これは中国とはまったく逆の現象でした。

さて、森立之は医家の七代目で、初代の森宗純は京都の人、二代の仲和とともに針医として名を知られました。三代は雲竹と称し、江戸に出て、腹診の研究を行い、名を残しています。四代は共之、五代は親徳、六代は恭忠といい、恭忠のとき、阿部侯福山藩の藩医となりました。森立之は、実際は親徳の娘の子ですが、恭忠の養子となり、森家七代目として家督を継ぎ、福山藩医となりました。

しかし、天保 8 (1937) 年、不祥事を起こしたため失職し、12 年間、家族を連れて相模周辺で流浪生活を余儀なくされました。弘化 5 (1848) 年、渋江抽斎ら友人の運動で復職の願いが叶い、江戸に戻り、医学館を活動拠点として、古典医学書の編集出版や、研究、執筆に従事しました。明治維新に際しては、いったん福山に転居しましたが、明治 5 年には再び東京に出て、以後、文部省編書課や大蔵省印刷局に入り、書物の編集に携わりました。息子に約之がおり、大槻玄沢の孫娘を嫁に迎え、父に似て有能で将来が期待されましたが、残念ながら明治 4 年、父に先立ちました。

森立之こそは最後にして最大の業績を残した考証医家といえるでしょう。幕末に、先輩、

同僚が次々と没していくなかであって、その業績や成果を受け継ぎ、恵まれた才能のもとに集約し、わがものとして開花させたのでした。著書はきわめてたくさんあり、枚挙に暇のないほどですが、代表として挙げるべきは、漢の三大医学古典、すなわち『神農本草経』『黄帝内経』『張仲景方』に対する注解書でしょう。

森立之はとりわけ本草学には関心が深く、永年の研究を重ね、嘉永7（1854）年、『神農本草経』を復元しました。安政4（1857）年にはその注釈書として『本草経攷注』18巻を完成しました。その7年後、元治元（1864）年には『黄帝内経素問』の研究書である『素問攷注』20巻を書き上げました。さらに慶応4（1868）年に至っては『傷寒論攷注』25巻の大著を脱稿しています。

これらは当時、考証学者の努力によって出現した古医学資料である『黄帝内経太素』『明堂』『新修本草』『医心方』『本草和名』『千金方』『外台秘要方』などを広く引用し、先輩や中国の考証学者の書から学んだ考証学手法をもって洞察した医学古典研究の最高峰と評価すべきものです。

今日でも日本はもとより、中国においてもこれらを凌ぐ研究書は現われていません。このほか『金匱要略』や『靈枢』の注釈書もあったといいますが、『金匱要略攷注』は一部が残っているだけで、『靈枢攷注』はすべてが失われてしまいました。ともかくその気力は驚くばかりです。学問に対するあくなき情熱、加えるに天賦の才と長寿がこうした業績を成さしめたといえるでしょう。しかし当時、幕末明治維新の情勢下、これらの大著は出版され、世に出ることはありませんでした。

明治18年12月6日、森立之は79歳で没しました。これをもって日本の考証医学の伝統は絶え、以後長きにわたってその偉業は忘れ去られることになりました。森立之は江戸音羽の洞雲寺に葬られました。洞雲寺は大正2年に池袋の現在地に移り、その墓も洞雲寺に現存しています。

森立之の歿した百年後の昭和61年12月、洞雲寺でその没後百年祭が行われました。その前後から森立之の業績は再び評価されるようになり、日本ではその著書の一部が影印出版されました。それがきっかけとなって、中国の研究者からも注目を浴びるようになり、現在では前述の『攷注』シリーズはすべて中国で活字出版されています。このほか、いまだ世に出ていない森立之の著作は少なからずあります。今後もその研究が期待されます。